武良茂先生の住所＝東京都調布市下石原二三九九

ロータリー 机

東　真一郎

え・武良　茂

私は、十五年ばかり前に古道具屋から買った汚くて古い大きな机を使用していたが、十五年間愛用したその机もいらなくなったので、部屋の片隅においた。家内は汚いから捨てると言ったが、その机が私に、なにか「親愛の情」をもっているような気がして、捨てることができなかった。

それからしばらくして、さる有名な(?)マンガ家が私の家に住むことになった。その男は、早速その大きな古机を使用したが、どうしたわけか机をひどくいじめるのだ。

ある日のこと、ヒイヒイという悲鳴を心の中に感じて庭に出てみると、その男が机の脚をノコギリで切って、いるではないか。

その男の言うには、机の脚が高すぎるというのだが、私は、とにかく脚を切るのはやめてくれと言った。だが、強情なその男は、二本切ったのだからあと二本切らないわけにはいかないと言って、とうとう切ってしまった。

それから間もなくのことであった…彼がマンガ界から失脚してしまったのは……。しかし私はその時は彼が机の脚を切ったために失脚したとは思わなかった。

それからまたしばらくして私の家には、「猫に似た男」が来て住んだ。そしてその机を使用して二三日。彼が言うには、「私はあの机がなにか〈親愛の情〉をもっているような気がしてならないのです。なにか謂われのある机ではありませんか?」

なるほどそう言われてみれば、その机は何かしら安心してよりかかれるような気がするのだ。いや、そればかりではない。言葉なき声でやさしくはげましてくれるようにさえ感じられるのだ。

私がそう答えると、彼はあわててその机の上においてあったキャベツをおろした。そして、「おそらくこれと同じ材料で同じ形の机を作ったとしても、これと同じものはできませんよ。なにしろこの机は心をもっていますからねえ」

その後彼はその机を大切にした。

それから間もなくであった。彼は幸運にめぐまれ、しかも美しい恋人まで得たのは……。

私は、もう一度その机を使ってみたくて、机のあくのを待っている。

若草漫歩　藤沢光男

冒険は危険でこわいヨ
だけど
冒険を忘れたら進歩がないネ